イチゴ育苗ポットへのLP コート全量基肥施用
第2報 施用量が生育や収量に及ぼす影響
高森敬一・石田豊明・西本 太（熊本県農業研究所センター）
Keiichi TAKAMORI, Toyoaki ISIDA and Futoshi NISHIMOTO:
Single basal application of POCTs (MEISTER) to strawberry pots
2.Effect of amount of applied fertiliser on growth and yield

イチゴは、栽培期間が長期にわたるので作業の省力化や作業性が目的の課題となっている。第1報では施肥の省力化を目的に肥効調節型肥料のイチゴ育苗ポットへの全量基肥施用による栽培が可能であろうことを報告した。ここでは、本報の速効基肥および夏季低温処理の違いがイチゴの生育、収量に及ぼす影響について検討した。

1. 材料および方法
試験で使用した肥効調節型肥料は育苗期から栽培期間の肥料を含む育苗開始時にポットヘ施用することでイチゴは収穫終わりまで栽培が可能である。

試験1 (1996年): 供試品種に "とよか" を用い、採苗を6月5日に行い育苗後39日の低温雑草処理を行った。試験区は本fl施用量を0、1.25、1.67、2.5g/株とした。定植期は9月5日、栽培個體数は株間110cm、株間22.5cm、2条植え（727株/α）とした。

試験2 (1997年): 供試品種等は前年同様とし夜冷短日処理を行った。試験区は本fl施用量を0、0、1.0、1.25、1.7g/株とした。定植は9月8日、栽培個體数は株間120cm、株間25cm、2条植え（666株/α）とした。

2. 結果および考察
試験1: 芽のクラウン径は慣行区、1.67g区、1.25g区がやや大きかった。葉色は施用量が多くなるにつれて深くなった。頂花房の出荷、開花は、1.25g区が早かった。開花率は施用量が多くなるにつれて低下した。第1次腋花房の出荷、開花は、1.25g区が早かった。収量は総収量、商品果収量および年内収量とも1.25g区が多かった。

試験2: 定植後のクラウン径、出荷数および頂花房の花房長は1.7g区が優り、0g区が劣った。頂花房の出荷、開花および収穫始めは施用量が多い方が早かった。開花率は慣行区、0g区が高かった。第1次腋花房の花房分化確認は0g区が10月1日で最も早くかったが、その後の分化は緩やかであった。他の区は、10月6日に高く、以降徐々に高くなった。第1次腋花房の出荷、開花は、1.25g区、0g区が早くかった。
以上の結果から、肥効調節型肥料は夏期の低温処理方法によりイチゴの生育に及ぼす影響は異なると考えられる。9月初旬に定植する場合の肥効調節型肥料の1株当たりN施用量は短期の低温雑草処理の場合1.25g、夜冷短日処理の場合1.25〜1.7g/株程度が適していると考えられる。1.7g以上については今後検討が必要であると考えられる。